

6

2005

June

<http://elm.m78.com/>

にれのき

“にれのき”は、エルムアカデミーが
父母・OB・サポーターに向けて発信する情報誌です。

特集

ケニアスタディーツアー報告

中学部：卒業とまとめのつどい

小学部：ホップ・ステップ・ジャンプ

NPO法人教育サポートセンターNIRE
設立総会レポート

教員リレーエッセイ

「知る」ついでに「知る」の必要性と、それがうみだす「世界」へのまなざし

ケニアスタディーツアーをふりかえって

昨年の「にれのき」でもお知らせしたケニアツアーが3月、無事終了しました。

参加メンバーは、青年を中心に6名。引率の中塚以外はアフリカ初体験。「危険じゃないのか?」「病気は大丈夫なのか?」といった不安や心配の方が大きかったかもしれません。日本に入ってくるアフリカの情報といえば「内戦」「飢餓」といった暗いイメージか、「野生動物」「奇妙な伝統文化」といった非日常的なイメージしかないのですから……。

そういう中でケニアを訪れたエルムの青年たちは、今回のツアーでどんなことを学んでくれたのでしょうか。「海外旅行というより、宇宙旅行に来たようだ」という感想にもあるように、日本とのギャップは相当大きなものだったようで、最初は「すごい」しか感想にもでてきませ

ませんでした。しかし、観光地ではない普通の人びとが暮らしている現場に入り、人びとと触れ合うなかで、少しずつそこで生きる人々が、どういう思いで暮らしをしているのかを感じ始めました。

小学校の父母と一緒に手伝った教室建設（石運び）、電気も水道もない村での不自由な生活（虫との格闘!）、ドキドキしながら英語で注文したレストラン（注文どおりに来ないときもありましたが……）、覚えたてのスワヒリ語・カンバ語でのあいさつ、買い物での値引き交渉などなど、旅が進むにつれてケニアの生活感覚にも慣れ、言葉の壁をのりこえて、しだいに人びとと積極的に交流するようになっていきました。

交流が進むにつれ、アフリカ（ケニア）が抱えているさまざまな問題や、そのおおもとな

っている「貧困」という問題について、参加したメンバーからたくさん質問があがってくるようになりました。毎晩遅くまで、その日見たことや感じたことを話し合い、いつしか自分たち自身の暮らしの「豊かさ」を捉えなおし、これから何を学び、どう生きるかといったテーマまで考えさせられるツアーとなりました。

エルムとアフリカ、塾とNGOといった、新しいつながりを持つ中で、私たち自身も暮らしや仕事、生き方をさまざまな角度から見直すきっかけとなったと思っています。これからも、アフリカ（ケニア）からの風を送り込んでいきたいと思えます。

中塚史行（なかつかふみゆき）



シュマケレ小学校前にそびえ立つバオバブの木



STUDY TOUR in KENYA

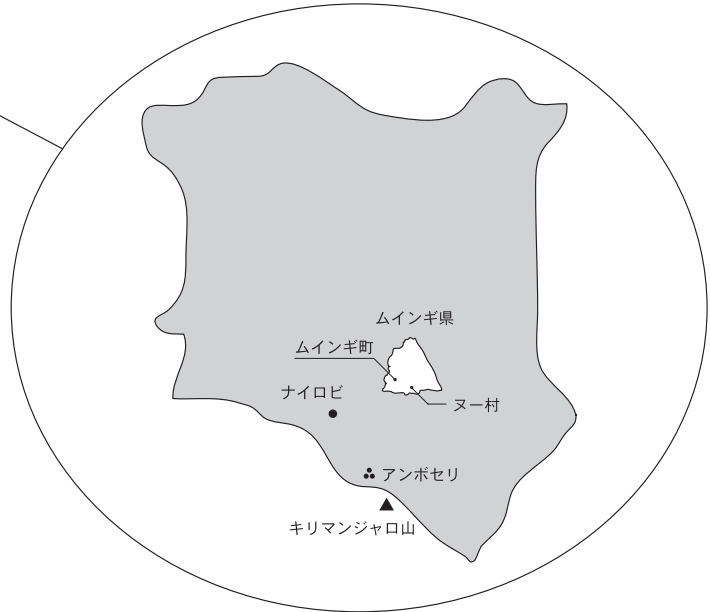
ナイロビ

人口2,870万人のうち、首都ナイロビには210万人が住み、およそ半数がスラムに住んでいると推定されています。衛生面をはじめ生活は厳しいのですが、村からの働き盛りの人々の流入は止まりません。

ムインギ県

多くの人たちが出て行った東部州ムインギ県では、頻繁に干ばつの被害も受けて、土地がやせていくなど環境の問題は深刻です。また5歳未満児の半数近くが栄養不良であること、小学校に入学した児童で、卒業まで在籍できるのは3分の1、と子どもたちは困難な状況に置かれています。

CanDoホームページより



ヌー村 silent=lodge



シュマケレ小学校での懇談



カンバ族の伝統料理



シュマケレ小学校外観



シュマケレ小学校の子どもたち



資材運び



ロックキャッチメントの丘



ムインギ Mwingi Cottage



ガトト小学校教室



文房具を寄贈



アンボセリ国立公園



マサイ族の村を訪問

3月17日	ナイロビからムインギ町を経由してヌー村へ。シュマケレ小学校の保護者・教員と懇談。カンバ族伝統の料理でもてなしを受ける。(ヌー、silent lodge 泊)
3月18日	シュマケレ小学校の新しい教室建設の資材(石)を川から運ぶ作業を保護者と行なう。ンザンズ小学校訪問。帰途、ンザンズビル、ロックキャッチメントの丘からヌー郡を一望する。(ヌー silentlodge 泊)
3月19日	ヌータウンのマーケットを散策後、ムインギへ。CanDo スタッフとヌーでの体験を振り返りながら会食。(ムインギ、Mwingi Cottage 泊)
3月20日	ムインギからナイロビへ。ナイロビの日本食レストラン(日本人倶楽部)で日本食を堪能。ハーリングムショッピングセンターへ。第1回お土産ツアー。(ナイロビ、olive gardens hotel 泊)
3月21日	ルーベン・スラムへ。ガトト小学校・ネーマ小学校訪問。歓迎セレモニーを受ける。文房具、サッカーボールなどを寄贈。ナイロビの中心街近くのサリットセンター内のフードコートにて昼食。ルワンダマーケットで第2回お土産ツアー。(ナイロビ、olive gardens hotel 泊)
3月22日	ナイロビから、アンボセリ国立公園へ。サファリを1ゲーム。(アンボセリ sofa lodge 泊)
3月23日	早朝サファリゲーム後、ナイロビへ。マサイの村を訪問。総括ミーティング。(ナイロビ、olive gardens hotel 泊)

こんな場所にもっと早く入りたかった

エルムの一年間の歩み、そして成果

中学部

今年もまた中学3年生がエルム中学部を巣立っていきました。卒業にあたって、子どもたちはエルムのことをよく「居場所」と表現します。もちろん、ただ居るだけの場所ではありません。子どもたちがいう「居場所」とは、ありのままの自分が出せる場所、自分を受け止めてくれる仲間がいる場所、仲間の中で自分が見えてくる場所、そして、これからの自分―「なってみたい私」が見えてくる場所……いわば自立への拠点としての「居場所」です。

先の見えにくい時代のなかで、子どもたちが「これから」に希望をもって生きていくためには、人と人と繋がり、自分と仲間が向き合い、そして「これから」を紡ぎ出してゆける「自立の拠点としての居場所」が重要であると強く感じます。

最後に「二〇〇五年度卒業とまとめの文集」から、「これから」を感じ、新しい一歩を踏み出した一人の生徒の作文を紹介します。

ありがとう

佐藤 里帆

エルムに入る前の自分は、すぐにあきらめたり、自分がきつくなると逃げ道をつくって、楽な方に行っていた。そんな自分がエルムに入って少し変わったような気がする。今まで考えていた自分とは少し違うと思う。

友達のこと、団の仲間、3Aの仲間……。エルムに出会ってなかったら、自分がどうなっていたのかも想像できないくらい、私にとってエルムは大きなものだと思う。

初めての合宿は、驚きの連続だった。大変なことはないと思っただけで、いろんな問題が起こって、話し合いの日々だった。自分にもつらいこともあって、無理をしている仲間を見たり、自分は何をすべきか悩んだこともあった。甘い考えだったけど、いつしか深く考えられるようになっていた。団の

仲間のことだからだと思っ。だんだん合宿の意味がわかったし、エルムの人たちと絆が深まった合宿だったと思う。私にとって合宿は、自分の人生の第一歩になった。

合宿も終わり、受験が近づくなかで、ある出来事があった。それは、学校で友達とうまくいかなくなったことだった。自分でもよくわからなくて悩んでいた。素直にお互いが話し合うことができなかったから。お互い言えないまま、仲が複雑になってしまった。エルムではそういうことはない。もし、それが起こってもすぐに話し合い、お互いの壁をなくしている。だから、エルムは話し合いで、より仲が深まっているんだと思う。でも、学校では話すことができなかった。自分が自分のことしか考えてなくて、友達を傷つけてしまったんだと思う。

本当に自分が嫌いになった。その日は、エルムを休んだ。あまりにもショックが大きくて……。したら小原から電話がきて、そのことを話した。自分のことをここまで話したことが初めてで、「頼っていいんだなあ」と思った。自然に涙が出てきた。あのときは本当に、小原ありがとう。心配してくれた人、ありがとう。本当に感謝しています。だからこそ、エルムは

私にとって、もうひとつの居場所。3Aのみんなに出会えて、本当によかった。みんなと過ごした日々は一生ものだと思う。こんな場所にもっと早く入りたかった。今そう思っても遅いけど、これからはエルムを続けていきたい。エルムのみんなは「友達」だけど、「仲間」という感じがする。そこが普段の生活とは違うところだと思う。友達と仲間の違いは、どう説明していいかわからないけど、仲間はエルムの仲間。友達は友達で大切な友達で、仲間は友達以上に親しみがある。いろんなことに挑戦してきた仲間だから。それが、エルムだと思う。みんな、ありがとう。



エルムって、いったいなんなんだよ！

小学部

卒業とまとめの実践をふりかえって

「エルムは開放感がある」
「本音で話し合いができる」
「みんなの意見をとりいれてくれる」
「話し合いをするとみんながスッキリする」
「みんなが納得するまで話し合いができる」

これらは、『小学部卒業とまとめの会』での、子どもたちの言葉です。一年間、特カリで本音で話し合いを重ね、たどり着いた結論がこれらの言葉でした。

話し合いの記録

二〇〇五年一月十六日

テーマは、肉まんを販売した当日に起こったハプニングをめぐってです。

大 「もっと事前に研究しておけばよかったんだよ」

大 「そうだよ」と数人の子どもが応援します。

大 「メニューを決めるまでの話し合いに時間がかかったんだ。だから実験する時間がなくなったよ」

大 「そうだった」「遅かったよ」という声が増えていきます。

伶 「早くメニューを決断すればよかったんだ」

伶 「みんなは同感しますが、どうすればよかったか迷っています。」

伶 「だから、多数決にすればよかったんだよ」

大 「この発言に教室は騒然。いち早く反論したのは旺久でした。」

旺久 「多数決で決めたらエルムの意味ないじゃん」

伶 「そんな甘いこと言ってるから決まらないんだよ」

大 「再び騒然とする教室。困っ

た顔。まわりの顔を見る子。みんな様々なことを考えています。突然立ち上がったのはトミーでした。

トミー 「エルムっていったいなんなんだよ」

トミーの発言に子どもたちは驚き、「ウォー」という、うなるような声をあげました。

この話し合いは子どもたちにとつて、とても大事なことで、つまり「エルムが自分たちにとつてどういう場所なのか」ということを気づかせました。これ以降、話し合いの雰囲気はがらっと変わりました。

まとめにかえて

いま、子どもたちは、〃ありのままの自分が出せない苦悩、仲間はズレにされるのではないかと不安を抱えています。年齢が上がるにつれて、だんだんと自分の思いや考えを人の前で出すことを躊躇するようになっていきます。

昨年4月に出会った子どもたちもそうでした。

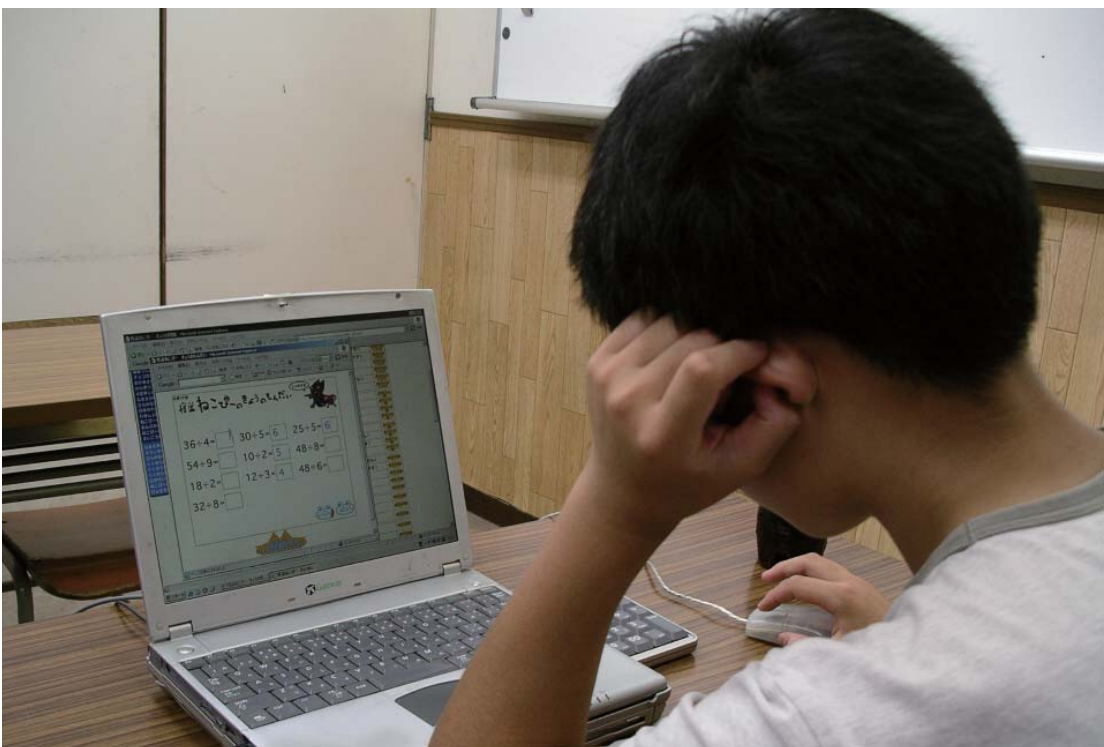
しかし、「ひとりひとりの声にしっかりと耳を傾け、一人ひとりを大切にすること」「話し合いを大切にすること」という一年間の取り組みで、子どもたちの固くなっていた心は開かれ、仲間の中で自分を表現してもよいという安心感をおぼえていきました。

子どもたちは自分を受け止めてくれる仲間を心から求めています。豊かな話し合いはこの仲間をつくるうえで欠かすことのできないものです。そのことを長い話し合いの中から子どもたちが導きだした、これらの言葉をおして、あらためて強く確信しました。



お笑い芸人のネタ風に（カノンの音楽にのせて）「悲しいとき〜、先生が多数決で決めるのを待っているとき〜」など学校体験をもとに作ったネタが披露されました。

■ 教育サポートセンターNIRE 設立総会を終えて



2件、40万円を超える助成金を獲得

LD（学習障害）やADHD（注意欠陥多動性障害）、高機能自閉症（アスペルガー症候群）などの軽度発達障害を持つ子どもたちを対象とした教育支援をおこなうため、NPO法人「教育サポートセンターNIRE」は5月に設立総会をおこないました。

今後、地域や学校、専門機関と連携し活動を進め、順調にいけば10月に東京都の認証を受ける予定です。

今年4月からは「発達障害者支援法」が施行されるなど、LDやADHDなどの軽度発達障害についての理解や関心は高まりつつあります。NHK教育テレビでも何度か番組で取り上げられ認識も深まり

つつあります。しかし、そのような子どもたちにとって教育的支援も含め支援はまだまだ不十分であり、日々苦しい学校生活などを余儀なくされているのが現状です。現在エールの通ってきている小学生も「学校はいやだ」「今日はエールだから一日が楽しい」など切実な声が届いています。

特別な教育的ニーズを持つ子どもたちの支援を、保護者だけがおこなうことは大きな負担です。通級指導教室への送り迎え、ボランティアの募集、個別指導の授業料、進学進路の問題など保護者の方々は多くの悩みを抱えています。こうした負担を軽減し、より適切な対応を進めるために私

たちの役割があると考えています。

その最初の取り組みとして、生活クラブ生協が主体となっている「草の根市民基金」に助成金を応募しました。5月21日（土）に行なわれた公開選考会では、私たちの活動をアピールし、全18団体中7位に入り、約14万円の助成金を獲得することができました。6月には、損保ジャパン記念財団からの助成の内定を受けました。この助成金は、教育サポートセンターNIREの最初の立ち上げ資金として、パンフレットの作成、ホームページの製作、教材の購入などにあてていきたいと思っています。

教育サポートセンターNIRE助成金獲得実績

団体名	助成金名	金額
生活クラブ生協	草の根市民基金	14.5万円
損保ジャパン記念財団	NPO 法人設立資金助成	30万円

発達障害が分かりやすく紹介された記事が掲載されています。このように、マスコミからの関心も高まりつつあります。



東京新聞 2005年6月12日付日曜版

エルムアカデミーとしては、このNPO活動はエルムの教育実践引き継ぎ、新しいよりレベルの高い特化した教育活動として位置づくと考えています。ぜひ、この活動にご理解の上、NPO法人会員になっていただくようお願いを申し上げます。

また、中塚を日本LD学会の特別支援教育士の要請セミナーにも派遣し、全国水準の実践レベルも獲得するように研修を積ませています。

教育サポートセンターNIREの活動

1

マンツーマンの“個別指導”で、学ぶ楽しさと自信をつけます

一人ひとりの特性（「読み・書き・計算」など）



オーダーメイド授業



学ぶ楽しさ・自信の回復

スポーツ教室

調理実習

夏のキャンプ

スキーツアー

仲間づくりや社会性を学ぶ
「総合的な体験プログラム」

2

3

学校・家庭・地域・専門家とのネットワークを大切にします

LD・ADHD についての学習会、セミナー、教育懇談会を開催します。

学校

地域

NIRE

保護者

専門家



「自分や相手を大事にする」
「深く考える」
「思ったことを伝える」

どれも人が生きていく上でとても大切なことですが、それらができている人・場所がどれほど世の中にあるでしょうか。そういう自分も、振り返ってみると自信の持てない部分が多々あります。

僕がエルムに関わり始めて一年ほど経ちますが、一番驚いた点はまさにそこでした。子どもたちも教員も、当たり前前前前が胸を張って当たり前前にできる場。それがエルムなのです。特にエルムの真髄は「話し合い」に見ることができません。エルムの話し合いを経験していく中で、集団に同意があることがどれほど強い力を生むかを知りました。「エルムだこんなことが出来るよね」「エルムではこんなことは絶対に許さない」と

おうみ つよし
1983年9月21日生まれ
山口県立下関西高校卒業後、
大学進学のため上京。現在、
慶應義塾大学法学部4年。
昨年、エルム中高合同合宿
のドキュメントビデオづくりに
スタッフとして参加。
今年度は中学1年生の数学
を担当。

という言葉がエルムの話し合いではよく出てきますが、そのような「文化」をつくる過程がとても大事で、それを確認し浸透させていく丁寧さが、エルムの集団にはあります。

子どもたちになぜ「エルムって」と言える信頼感や安心感があるのか考えると、やはり教員自身のエルムや子どもに対する姿勢が生み出している部分が大いと思います。「僕が子どものときにこんな教員がいたら、どれほど良かっただろう」と思わずにいられないくらい、子どものことを考え抜き、日々子どもや子どもの抱える問題と対峙していますし、僕のようなエルム1年生の教員に対してもエルムらしさを伝えようとしてくれます。

まだまだ足りない点ばかりだと自覚していますが、エルム文化を支えられる教員一人になるために、エルムを支えられながら勉強しています。

夏合宿ドキュメント DVD 配布開始

エルムの合宿は「すごい」と子どもたちは口をそろえて言います。しかし、合宿の中身は外には見えない状況でした。エルムの教育を伝えるには合宿を抜きには語れない。ということでプロジェクトチームを組み、「小原先生と3A」を追いかけたドキュメンタリービデオを制作しました。試写会を受けて若干の修正も終わり、現在保護者の皆様、関係各所に配布を開始しています。

入手を希望される方は、エルムアカデミー(03-3784-5676)までご連絡ください。

教育
ドキュメント

なってよかった、 もうひとりの「私」

04年 エルムアカデミーの夏

東京・品川にある小さな学習塾で、20年にもわたって「本物の教育」を追い求め、実践を積み重ねてきた「エルムアカデミー」。その取り組みの大きな柱となる夏合宿に、初めてカメラが密着。

子どもたちが本気で笑い、泣き、唄い、踊る。本物だけがもつ輝きがそこにはあった。